

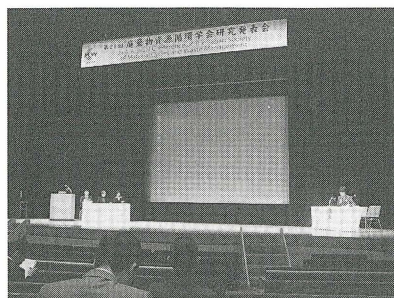
物質フロー研究部会

〔G8〕：レアメタル分析手法相互検証への取り組み その2

レアメタルの戦略的利活用とリサイクルの促進は、国際的資源需要の面からも重要な国家戦略の一つになりつつある。本部会では資源性と有害性の両側面からレアメタルリサイクルに関する議論を行ってきており、今回の企画セッションでは昨年度から研究プロジェクトとして進めている「製品中レアメタル等の分析法の相互検証（第二フェーズ）」の状況について報告と、関連するテーマについての講演がなされた。

初めに、環境省廃棄物リサイクル対策部リサイクル推進室の豊住朝子課長補佐から「使用済み小型家電からのレアメタル回収及び適正処理に関する研究会について」として、研究会の検討体制や平成20年度および21年度のモデル事業実施の結果と検討事項についての報告が行われた。7地域で行われたモデル事業における回収データおよび統計データから、排出ポテンシャルに対する回収ポテンシャルの割合は1%～20%程度にとどまっていることがわかり、効果的・効率的な回収方法を検討することで、さらなる小型家電の回収を見込むことが可能であることが示唆された。また、モデル事業における金属含有状況調査や中間処理・レアメタル回収における現状から、リサイクルにおける環境管理に関する論点が整理された。最後にリサイクルシステムの制度化に向けた整理がなされた。今後システムの構築にむけ、目的や必要性を踏まえた上で対象とすべき鉱種や対象品目のオプション、および社会的仕組みのオプションを組み合わせた複数案のなかで、経済性・効果・影響・政策措置の必要性等の複数の評価軸で評価して総合的にメリット・デメリットを整理していく方向性が示された。

次に国立環境研究所の貴田晶子特別客員研究員からは、「製品中レアメタル等の分析法に関する中間報告」がなされた。昨年度の第一フェーズでは8機関が参加の下、焼却灰やPC基板の実試料を用いて分析法標準化にむけた相互検証がなされた。今回の発表では、昨年度の課題であったバラツキの大きいAgやTa等の元素に対する前処理方法について、現在までの検討結果の報告として、1) Agについては6M塩酸を用いてクロロ錯体と



しての溶解が現在のところ最も有効であること、2) Ta等に対してはHFによる溶解が必要であることが示された。

(株)ニッテクリサーチの宮崎徹氏は、「今後のレアメタル分析方法の相互検証」として第一フェーズの取り組み結果の検討内容および結果を報告し、第二フェーズにおける配布試料や前処理方法案について提示した。分析対象は国家備蓄7鉱種、要注視10鉱種およびAu、Agに加え、その他主要元素・有害元素5種を含めた計24元素としており、配布試料は3種類の標準液に加え、焼却灰（主灰）および基板（ATM基板粉砕物）の予定である。

最後に京都大学の平井康宏准教授を進行役として、3人の講演者に対する質疑と総合討論がおこなわれ、レアメタルリサイクルにおけるリスク評価や世界的なRoHS/WEEE指令対応の現状を踏まえた日本の戦略について議論がなされた。

本セッションにおける3人の講演者の発表内容は、物質フロー研究部会ウェブサイトからダウンロードできる。
(<http://eprc.kyoto-u.ac.jp/materialflow/>) 第二フェーズの製品中レアメタル等の分析法相互検証は現在参加機関公募中であり、相互検証に関してご意見のある方や参加を希望される方は、物質フロー研究部会レアメタル相互検証グループまでぜひご連絡いただきたい。

酒井伸一・平井康宏（京都大学）